The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	連動する源氏物語 : 笛を吹くこと
Author(s)	加藤, 昌嘉
Citation	詞林. 1997, 21, p. 31-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67397
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

連動する源氏物語

―笛を吹くこと―

加藤　昌嘉

一　連動・連繋・線・鎖列

『源氏物語』の中で、身振りや姿態、言葉や事物が、共鳴し、連繋して線を成している。その線は、また別の線と絡まり合って新たな鎖列を創ったり、触手を伸ばしてそこかしこの細部を組み込んだりする。それらはすべて『源氏物語』という連動機械の自己内運動だ。そして、その、常に顫動してやまぬ自律機械の強度をことごとに覚知することが、テクストを読むということに他ならない。[1]

今回は、《笛を吹く》という身振りが、如何なる連動を成し、如何なる線として流れているか、また、その線が如何なる鎖列を形成し、如何様に諸細部を連結しているかを辿り見てゆく。もちろん、この《笛を吹く》という身振りが、無数の線の中の任意の一筋であることはいうまでもない。

二　笛を吹くこと

星の数ほど犇めき、奇瑞や伝授、准拠や王権といった術語を蔟出させた、『源氏物語』の音楽を巡る諸論稿[2]は、何故かしら琴については多弁であるにも拘わらず、こと笛については「柏木遺愛の笛」の問題に視線を集中させ、これをも相伝や王権といった概念を以て把捉せんとしている。[3]

『源氏物語』にあっては、男同士が車の中で笛を吹き合うこともあれば、幼い少年たちが可愛らしい笛の演奏をすることも、名もない楽人たちが笛の役を務めることも、もちろんある。だが、とりわけ、その主だった登場人物たちが見せる《笛吹く》姿態は、独自の連動を以て鎖列を成し、宏大なテクストを縦横に駈け巡ってはいなかったか。

柏木の死後一年余りが過ぎた秋の夕べ、落葉宮と想夫恋を合奏した夕霧に、宮の母一条御息所から柏木の形見の笛が贈

られる。

御贈り物に笛を添へてたてまつりたまふ。

（横笛　三三〇頁）

これを受けた夕霧は、生前の柏木を「思ひ出で」つつ、その《笛を吹く》。

今すこしあはれ多く添ひて、こころみに吹き鳴らす。

（同右）

柏木の笛の相伝の問題は今は措き、ここでは、夕霧の《笛吹く》身振りが、落葉宮と母一条御息所の前でなされていることにこそ目を据えよう。そしてその後、御息所の反対と当の落葉宮の拒絶がありながらも、この男女が結ばれることになる「夕霧」巻を憶い起そう。

或いは、「時雨うちして、荻の上風もただならぬ夕暮」、雲居雁とその父内大臣、祖母大宮とが、静やかに琴掻き合せ物語などするところに夕霧が現れるくだり。

このところ学問にばかり励んでいるという彼に、内大臣が笛を手渡した。

「時々はことわざしたまへ。笛の音にも古事は伝はるものなり」とて、御笛たてまつりたまふ。

（少女　二三六頁）

さしだされた夕霧は、早速その《笛を吹く》。

いと若うをかしげなる音に吹きたてて、

（同右）

それが「いみじうおもしろければ」、皆は「御琴どもをばしばしとどめ」、内大臣は「拍子おどろおどろしからずうち鳴らし」て歌うのだった。

ここでも、夕霧の《笛吹く》姿態が、恋する女君とその庇護者の前で表出されていることに留目しよう。そして、「御几帳隔てて」の対面しか許されなかった夕霧と雲居雁とが、内大臣の軟化によってめでたく結ばれる「藤裏葉」巻を想起しよう。

或いはまた、「桐壺」巻末。

「大人になりたまひてのちは、ありしやうに御簾のうちにも入れたまはず」という桐壺帝の措置によって、藤壺と隔てられ、鬱屈せる光源氏には、しかし、「琴笛」による交流が許されていた。

御遊びのをりをり、琴笛の音に聞こえかよひ、ほのかなる［藤壺宮の］御声をなぐさめにて、内裏住みのみこのましうおぼえたまふ。

（桐壺　四〇頁）

この習慣は、藤壺の参内があった後も、「例の」如く行なわれる。

明け暮れこなた［藤壺のもと］にのみおはしまして、御遊びもやうやうをかしき空なれば、源氏の君も暇なく召しまつはしつつ、御琴、笛など、さまざまにつかうまつらせたまふ。

（若紫　二一六頁）

この二例の間に、光源氏と藤壺の逢瀬、及び、藤壺の懐妊があったことについては贅言を要しまい。ここでは、光源氏の《笛吹く》身振りが、桐壺帝と藤壺との前でなされたことに目を注ごう。

すなわち、《笛吹く》男君は、庇護者の反対や当の女君の拒否がありながらも、恋する女性との接近遭遇を果し、彼女を奪取・獲得する。『源氏物語』に於いて、《女性の前で笛を吹くこと》は、きまって《その女性を獲得すること》と連動してあるのだ。

但し、男君の見事な笛の音によってその女君や両親の心がほだされたとか、笛を吹くことが女君を獲得することの伏線となるとかいうことでは、全くない。

一条御息所は、死ぬまで二人の交際を不愉快に思っていたし、内大臣は、娘と夕霧との関係を知って赫怒する。桐壺帝は、おそらく不義密通の事実を知らぬながらも、常に二人の間に「隔て」を設けんとしていた。しかし、それでも、テクストの上では、《笛吹く身振り》と《女性との接近遭遇》とは、強い共鳴関係を以て連動する。

ここからは、その鎖列が、形を変えつつ伸張し、あちこちの細部を連結する、そんな多様な拡がり、多彩な組み込みの様相を眺めてゆく。

三　笛吹く光源氏・笛吹く夕霧

「あざれたる袿姿にて、笛をなつかしう吹きすさびつつ」

「西の対にぞわたりたまふ」た光源氏と、幼くあどけない若紫とが、琴笛を合せる「紅葉賀」巻のくだり。

人召して、御琴取りよせて弾かせたてまつりたまふ。…さしやりたまへれば、え怨じ果てず、いとうつくしう弾きたまふ。ちひさき御ほどに、さしやりてゆしたまふ御手つき、いとうつくしければ、らうたしとおぼして、笛吹き鳴らしつつ教へたまふ。…おもしろう吹きすさびたまへるに、かきあはせまだ若けれど、拍子違はず上手めきたり。

（紅葉賀　三〇頁）

これを、仲睦まじい男女の和やかな琴笛の合奏として読むことは出来ない。もちろんこの場面は、光源氏が若紫を奪取・獲得した後のものであるから、《笛を吹くこと》と《女君を得ること》との直截な連動が果されているわけでは、確かにない。だが、ここで想起すべきは、前節で挙げた「桐壺」「若紫」巻、藤壺の前でなされていた、光源氏の《笛吹く》身振りである。

つまり、光源氏は、かつて藤壺との間でなされた琴笛の合奏を再現するべく、若紫に、まさに〃紫のゆかり〃たるに相応しい機能を賦与しているのだ。《笛を吹く》線・《女君を

獲得する〉線というテクストの鎖列に忠実に連結する共鳴者として、この光源氏はある。

或いは、「梅枝」巻。

薫物競べの後の宴遊、明石姫君の裳着の儀式の「御遊びのうちならし」＝試演で、柏木、その弟弁少将、螢宮らが琴どもを「掻きたてたる」、そうしたところに、夕霧が〈笛を吹く〉くだり。

宰相の中将［夕霧］、横笛吹きたまふ。をりにあひたる調子、雲居とほるばかり吹きたてたり。弁の少将［柏木の弟］、拍子取りて、梅が枝出だしたるほど、いとをかし。

（梅枝　二六〇頁）

この「雲居とほるばかり」は、夕霧を想う雲居雁の口から発せられた、「少女」巻の次の言葉と連動する。

幼きここちにも、とかくおぼし乱るるにや、「雲居の雁もわがごとや」と、ひとりごちたまふけはひ、若うらうたげなり。

（少女　二四六頁）

当然、この言葉は、諸註の指摘する古歌、

霧深き［く］雲居の雁もわがごとや晴れせずものの［は］悲しかるらむ　（『奥入』［『源氏釈』］出典未詳歌）

とも連繋している。

すなわち、「梅枝」巻の宴の場には、雲居雁もその父内大臣も姿を表さぬものの、というか、姿を表さぬが故にいっそう、夕霧の笛は、「雲居とほるばかり」に、つまり「少女」巻での「晴れせ」ぬ「霧深」い「雲居」を吹き通さんばかりに喨々たる音を立てるのだ。

そして更に、この〈笛を吹く〉線と〈女君を獲得する〉線との鎖列に連結し得る細部として、次の唱和歌を見なければならない。このとき、二人の男君が雲居雁の兄弟であること、及び、続く「藤裏葉」巻で夕霧の結婚が成就することに留意したい。

御土器参るに、宮、

［螢宮］「鶯の声にやいとどあくがれむ心しめつる花のあたりに

千代も経ぬべし」と聞こえたまへば、

［光源氏］色も香もうつるばかりにこの春は花咲く宿をかれずもあらなむ

頭の中将［柏木］に［盃を］賜へば、取りて、宰相の中将［夕霧］にさす。

［柏木］鶯のねぐらの枝もなびくまでなほ吹きとほせ夜半の笛竹

宰相の中将、

［夕霧］「心ありて風の避くめる花の木にとりあへぬまで吹きや寄るべき

情なく」と、皆うち笑ひたまふ。弁の少将［柏木弟］、

［弁少将］霞だに月と花とをへだてずはねぐらの鳥も

ほころびなまし　（梅枝　二六〇頁）

確かにこれは五人による唱和なのだが、しかし、後三者、柏木・夕霧・弁少将の歌には、《笛を吹くこと》と《女君を獲得すること》との連動を見ることが出来る。

柏木の歌、「夜半の笛竹」を「吹きとほせ」とは、もちろん「雲居雁への求愛をし通せ」の意であり、「鶯」＝雲居雁、「枝」＝その父内大臣、となる。

対する夕霧の返歌は、「風さえ敬遠してよけてゆく」内大臣に、「鳥」＝雲居雁までもが「いたたまれなくなってしまうほど」「想いを訴えるべきでしょうか」、となる。だからこそ、「情なく」＝「そこまでするのは思いやりがない」という自尊を装った夕霧の言葉に、皆は「うち笑ひたまふ」のだ。

そして、続く弁少将の歌は、「あなたの笛によって」、せめて「霞」＝「晴れせぬ霧深い雲居」さえ澄み通れば、雲居雁や内大臣とのわだかまりも氷解し、二人の結婚は万事うまくゆくでしょう、という応援となる。

この唱和歌は、小町谷照彦氏が、「管絃が賑やかに奏せられる六条院の繁栄をおのずから浮かび上がらせ、「藤裏葉」の六条院行幸の大団円へと照準を合わせている」「文字通り花鳥風月詠」と述べる[5]如く、諸註釈書に於いても、置かれている言葉そのままに読み解かれ訳されているようだ。

その一方、高橋亨氏は、「梅の花さく宿」を玉鬘の住んでいた六条院だと見、更に、柏木による六条院の女主人の誘惑という「きわどい可能性を深層に潜ませた両義性」を説いている[6]。また、河添房江氏は、高橋論文を受けつつ、「「うぐひす」の指示内容が光源氏に切り替えられ、「ねぐらの枝」に六条院の女達をなぞらえうる」とし、更に、「若菜上」巻以降の「六条院の侵犯者」たる柏木を透かし見ている[7]。

確かに、柏木・女三宮密通事件にまで射程を拡げた高橋氏や河添氏の読みは、『源氏物語』を有機的に稼働させるものではあろうけれども、あくまでそれは潜在的な可能性に過ぎない。むしろここでは、「雲居」「弁少将」そして「夕霧の笛」を鍵にして繋がる「少女」「梅枝」「藤裏葉」三巻の連続系の上で、或いは、《笛を吹くこと》《女君を獲得すること》の鎖列の流れの上で、テクストを辿り読もう。

次に挙げるのは「藤裏葉」巻末、この「梅枝」巻の歌群との連繋を成す、夕霧の《笛吹く》姿である。

［夕霧は］笛つかうまつりたまふ、いとおもしろし。唱歌の殿上人、御階にさぶらふなかに、弁の少将の声すぐれたり。なほさるべきにこそと見えたる御仲らひなめり。　（藤裏葉　三〇八頁）

この殿上の宴席に於いて、夕霧の《笛を吹くこと》《雲居雁を獲得すること》の連動は、めでたく完遂された。「梅枝」巻で希求された結婚の成就を祝すかのように、夕霧は喨々と《笛を吹く》。もちろんその席には、雲居雁の父太政

大臣がいる。そしてここでも、弁少将が、夕霧を応援する美声を添えていることを確認しておこう。

また、その場には、光源氏のみならず、朱雀院・冷泉帝までもが顔を揃えていることも見ておかねばなるまい。夕霧の《笛を吹くこと》の線は、常に《雲居雁を獲得すること》の線と連鎖してあったが、ここに及んで、同時に、また新たに、《院・帝の娘を奪取・獲得すること》という線とも連鎖すべく起動し始めたといえる。蓋し、このくだりは、夕霧が《朱雀院の娘落葉宮との接近遭遇》を果す「夕霧」巻に繋がるだろう。但し、「藤裏葉」巻の時点での構想だの成立だのを穿鑿しようというのではない。夕霧を、「きよら」で「光いとどまさり」、帝に劣らぬ「けはひ」持った超人的主人公に変えてしまうこの「藤裏葉」巻にあっては、《高貴なる夕霧》という線が、《笛を吹く》線・《女君を獲得する》線に更に絡まり合い、《院・帝の娘の獲得》を志向して、結果的に「夕霧」巻に流入してゆく、と考えておけばよい。

四　笛吹かぬ柏木

光源氏や夕霧が、テクストの連動に忠実な共鳴者として、最愛の女性を獲得すべく《笛吹く》身振りを表出していたのに対し、柏木なる人物は、何故かしら笛の名手という印象を人々に与えているにも拘わらず、『源氏物語』の中で、ただの一度も《笛吹く》姿態を表さぬ存在者としてある。

柏木の《笛吹く》音だけが鳴り響く次のくだり。

玉鬘とともに西の対にいる光源氏のところへ、「東の対のかたに、おもしろき笛の音、箏に吹きあはせ」たる楽の音が響き伝わる。

中将［夕霧］の、例のあたり離れぬどち遊ぶにぞありける。［光源氏］「頭の中将［柏木］にこそあなれ。いとわざとも吹きなる音かな」とて、立ちとまりたまふ。

（篝火　一一八頁）

聞こえて来た笛の主を柏木であろうと推測する光源氏は、彼らを玉鬘の庭へ喚び寄せ、管絃の遊びをさせた。

［光源氏は］御琴ひき出でて、なつかしきほどに弾きたまふ。源中将［夕霧］は、［笛を］盤渉調にいとおもしろく吹きたり。頭の中将［柏木］、心づかひして出だし立てがたうす。

（同右）

ところが、ここで《笛を吹く》のは夕霧であって、先程の笛の主が誰だったのか語られぬ上、当の柏木は、拍子も唱歌も「出だし立てがたうす」る。結局、光源氏は「御琴は中将［柏木］にゆづらせたまひ」、その琴の音が「げにかの父大臣の御爪音に、をさをさ劣らず、はなやかにおもしろし」と語られて終る。

或いは、「若菜下」巻。

六条院に於いて、紫上、明石君、明石女御、そして女三宮による女楽が催されるというのに、《笛を吹く》のは夕霧や髭黒の幼い子供たちであって、柏木は出席しないばかりか、その存在が語られることさえない（一六九頁～）。

しかも、楽が終ると、女三宮から高麗笛を贈られた光源氏と、我が子の持っていた横笛を取った夕霧とが、いわば〃女子供の楽〃の掉尾を飾るべく《笛吹く》姿を見せる。

いみじき高麗笛なり。［光源氏が］すこし吹き鳴らしたまへば、皆立ち出でたまふほどに、大将［夕霧］立ちとまりたまひて、御子の持ちたまへる笛を取りて、いみじくおもしろく吹き立てたまへるが、いとめでたく聞こゆれば、

（若菜下　一八五頁）

そしてこれが、

いづれもいづれも、皆御手を離れぬものの伝へ伝へ、いと二なくのみあるにてぞ、わが御才のほど、ありがたくおぼし知られける。

（同右）

という光源氏の感想で閉じられるのであってみれば、この六条院の楽は、〃女楽〃といいつつも、その女君たちを囲繞し包摂する光源氏直系の男たちの楽の才をこそ確認するという機能を発露させたとさえいえる。女三宮を前にした光源氏と夕霧の炳然たる姿態によって、ただの一度も《笛吹く》身振りを表出しない柏木は、彼らの陰翳となるのだ。

或いはまた、その「若菜下」巻の後部、延期されていた朱雀院五十御賀の試楽が催されるくだり。

あくまでも〃試楽〃であって、公の儀式ではないという点を確認しておこう。「御方々もの見たまはむ」、つまり女君たちも見物に来る場なのである。そしてそこには柏木も出席していた。ところが彼は、女三宮の前で《笛を吹く》機会を持ちながらも、

［光源氏］「…かの大将［夕霧］ともろともに見入れて、舞の童べの用意、心ばへ、よく加へたまへ。ものの師などいふものは、ただわが立てたることこそあれ、いとくちをしきものなり。…」

（若菜下　二五六頁）

という光源氏の要請で、この試楽の音楽指導、総合演出にあたることになり、結局ここでも《笛吹く》姿を見せることはない。

或いは、「横笛」巻。

柏木の形見の横笛について、光源氏の口からその由来が語られた。

［夕霧は］かの夢語りを聞こえたまへば、［光源氏は］とみにものたまはで聞こしめして、おぼし合はすることもあり。［光源氏］「その笛は、ここに見るべきゆゑあるものなり。かれは陽成院の御笛なり。それを故式

部卿の宮の、いみじきものにしたまひけるを、かの衛門の督［柏木］は、童よりいと異なる音を吹き出でしに感じて、かの宮の萩の宴せられける日、贈り物に取らせたまへるなり。…」　（横笛　三四〇頁）

このくだりを巡っては、「陽成院」や「故式部卿の宮」といった人物の准拠が論じられている[8]ようだが、問題は、柏木が笛を賜ったその「萩の宴」なるものが、これまで『源氏物語』には全く顕出していなかった事実であるという、そのことにこそある。明石一族の琴の相伝[9]が、「延喜帝」や「中務宮」といったテクスト外の史実と連結しつつ、しかもそれを内部化して、父から娘、母から子という形で語られていたのとは異なり、柏木の《笛吹く》身振りは、〃説明としての語り〃の上にのみあって、〃描写としての語り〃の上には顕現し得ていないのだ。

すなわち、《笛を吹くこと》が《女君を獲得すること》と連動する『源氏物語』にあって、一度として《笛吹く》身振りを表出しない柏木は、同時に《意中の人＝女三宮の獲得》を果し得ぬ存在者としてある。

五　背馳する柏木

ここで、柏木は女三宮を奪取したではないか、という反論が、誰しもの脳裡をよぎるだろう。確かに、柏木と女三宮との密通は、光源氏と藤壺とのそれを反復するものであって、光源氏が《女君を奪取した》と説きつつ、柏木は《女君を獲得しない》と定位するのは矛盾を孕むことではあろう。しかし、柏木は、この《女三宮との接近遭遇》を、『源氏物語』というテクストの鎖列から逸脱する形で実現せんとしていた点で、光源氏たちとは截然と分かたれる存在者なのであった。

烏帽子ばかりおし入れて、すこし起き上がらむとしたへど、いと苦しげなり。白き衣どもの、なつかしうなよよかなるをあまた重ねて、衾ひきかけて臥したまへり。　（柏木　二九〇頁）

対面した夕霧は瀕死の柏木の姿を見る。彼の遺した最後の長い言葉は、

「…六条の院にいささかなることの違ひめありて、月ごろ、心のうちにかしこまり申すことなむはべりしを、いと本意なう、世の中心細う思ひなりて、病づきぬとおぼえはべしに、［光源氏の］召しありて、院［朱雀院］の御賀の楽所のこころみの日参りて、御けしきを賜はりしに、なほ許されぬ御心ばへあるさまに、御目尻を見たてまつりはべりて、いとど世にながらへむことも憚り多うおぼえなりはべりて、あぢきなう思うたまへしに、心

の騒ぎそめて、かくしづまらずなりぬるになむ。……」

（柏木 二九二頁）

というものであった。高橋和夫氏が述べているように[19]、柏木は、朱雀院五十賀の試楽の召しを、「この「違ひ目」が赦されたことと勘違いした」のだろう。この遺言は、「源氏がこの事態を正確に知ること」、「密通の止むを得ぬことを認めること」を願ってのものである。だが、この柏木の思念は、既に『源氏物語』の鎖列に悖反するものだった。

ここで、この遺言と並立し連動する、夕霧の夢に現れた柏木の発言を見ておかねばならない。

［夕霧の］すこし寝入りたまへる夢に、かの衛門の督、ただありしさまの袿姿にて、かたはらにゐて、この笛を取りて見る。夢のうちにも、亡き人の、わづらはしう、この声を尋ねて来たると思ふに、

［柏木］「笛竹に吹き寄る風のことならば末の世長きねに伝へなむ

思ふかた異にはべりき」と言ふを、問はむと思ふほどに、若君の寝おびれて泣きたまふ御声に、さめたまひぬ。

（横笛 三三三頁）

夢枕に立ったこの「ただありしさまの袿姿」、つまり白い部屋着姿と、夕霧に遺言を告げた先の「白き衣どもの、なつかしうなよよかなるをあまた重ね」た姿とが契合する。

更に、「笛の音を我が子孫まで伝えて欲しい」という思いは、一条御息所から形見の笛を譲り受けた夕霧が回想する次の柏木の発言とも連繋しよう。

これ［笛］もげに［亡き柏木が］世とともに身に添へてもてあそびつつ、［柏木］「みづからも、さらにこれが音の限りは、え吹きとほさず。思はむ人にいかで伝へてしがな」と、をりをり聞こえごちたまひしを思ひ出でたまふに、今すこしあはれ多く添ひて、こころみに吹き鳴らす。

（横笛 三三〇頁）

つまり、柏木が夕霧に告げんとした願いとは、《笛を吹くこと》と《女君を獲得すること》だったのだ。《我が笛の音を吹き通すこと》と《女三宮との関係を光源氏に容認してもらうこと》とが同義として願われ、一方が夢、一方が遺言という方法により、並立し連動する形で夕霧に托されている。そして、ここにこそ柏木の錯誤があった。但し、彼の内面上・人格上に於いての謂では、決してない。《笛を吹くこと》なくして《女三宮との接近遭遇》を果した点が、もしくは、《女三宮の獲得》を《笛を伝えること》で赦されんとした点が、『源氏物語』の鎖列に、つまりテクストの論理に背馳するという意味で、柏木は錯誤せる存在者なのだ。

六　筍を喰う薫

さて次には、今まで辿り見て来た《笛を吹くこと》《女君

を獲得すること》の鎖列が、更に触手を伸ばして他の細部までをも連結してゆく様を眺めてみよう。

「横笛」巻頭、柏木の一周忌法要の日、故人を「恋ひしのびたまふ」人々の追慕哀悼の様が語られた後に、その場面はある。

寺に籠る朱雀院から、出家生活を送る女三宮のもとへ、山で収穫した「野老」＝山のイモ、「筍」＝タケノコといった春の便りが届けられた。

御寺のかたはら近き林に抜き出でたる筍、そのわたりの山に掘れる野老などの、山里につけてはあはれなれば、たてまつれたまふとて、　（横笛　三二〇頁）

父娘は、この「野老」を掛けて、「同じところ…」「あらぬところ…」という歌を交す。そこに光源氏が現れ、女三宮と話していると、「乳母のもとに寝たまへりける」若君＝薫が、「起きて這ひ出で」て来た。

わづかに歩みなどしたまふほどなり。この筍の髻子に、何とも知らず立ち寄りて、いとあわたたしう取り散らして、食ひかなぐりなどしたまへば、　（横笛　三二三頁）

光源氏は、「あならうがはしや。いと不便なり。かれ取り隠せ。食物に目とどめたまふと、もの言ひさがなき女房もこそ言ひなせ」などと言って「笑ひ」ながら「かき抱きたまふ」のであるが、薫は、

御歯の生ひ出づるに食ひあてむとて、筍をつと握り持ちて、雫もよよと食ひ濡らしたまへば、「いとねぢけたる色好みかな」とて、

［光源氏］憂き節も忘れずながらくれ竹のこは捨てがたきものにぞありける

と、ゐて放ちてのたまひかくれど、［若君は］うち笑ひて、何とも思ひたらず、いとそそかしう、這ひおり騒ぎたまふ。　（横笛　三二四頁）

のであった。

この場面については、中村健一氏が、幼い薫と、「土中から突き出る異様な形態と、その後の旺盛な伸長力・生命力をもつ竹」との「隠喩」関係を説き、「好まれざる出生と成長が、鱗片状の葉鞘をみずからはぎながら伸び上がる形状の筍と重ね合わされていた」と述べている。[11] また最近では、松井健児氏が、「幼児の身体の持つ不気味さ」に着目し、この若君の誕を「秩序あるものに侵入しそれを犯す不穏な意味へ反転する」ものだと述べ、[12] 或いは、小林正明氏が、筍は「小文字のファルス」であり、「親離れ・子離れが未熟なままの相姦的な境域を表示する物象」、「母宮の愛情そのものを表象する母子癒着的な物象」だと述べている。[13]

しかしもうそろそろ、作品の裏側や奥底に、あまりに観念的・象徴的な意味を幻想するのはやめにしよう。誰の目にも見えている表面にこそ顕現している、身振りや姿態、言葉や

事物の、その運動の力の上で、その連繋する線の上で、テクストを覚知しようではないか。

留目すべきは、これが柏木の一周忌法要の日であること、野老や筍が朱雀院から女三宮に贈られていること、この場には女三宮と光源氏とがいること、この直後柏木が夕霧の夢に現れ遺品の笛の行方を案ずること、薫の筍を口にあてがう仕種、或いは、《笛を吹く》線と《女君を獲得する》線、そして、その二つながら果し得なかった柏木の遺言、である。

すなわち、「筍」は、笛竹ならざる笛、完全な形にまで成らぬ、未発の、未成熟の笛なのだ。この薫の仕種は、恋慕する女三宮やその庇護者光源氏の前で一度として《笛を吹く》身振りを表出し得なかった柏木の、いわば代理行為としてある。

だが、それは、いじらしく健気ではあるものの、やはりどうにも虚しい代理行為であった。朱雀院や女三宮は「筍」には目をやることなく「野老」の歌だけを詠んでいるし、光源氏は「ねぢけたる色好みかな」などと言いながら薫を「筍」から引き離そうとする。そして何より、「筍」も薫も、あまりに若すぎた。ここには、《笛を吹くこと》《女君を獲得すること》のどちらも成し得ぬ、二つの線を連動させる以前の、力なき身振りが発露している。

七　笛吹く薫

成人した薫は、幼い頃の有様とは断絶しているようにも、また、生前の柏木の属性を担って造形されているようにも見える。[14] しかるに、ここでは、まずは、《笛を吹く》線の上にのみ配備される薫の姿態をこそ眺めてみよう。

「宇治のわたりの御中宿」で、匂宮や薫、夕霧の子息らが、「御琴など召して遊」んでいた。そこから「ささしわたるほどなる」ところに住む八宮は、「追風に吹き来る響きを聞きたまふに、昔のことおぼし出でられ」る。

［八宮］「笛をいとをかしうも吹きとほしたなるかな。誰ならむ。昔の六条に院の御笛の音聞きしは、いとをかしげに愛敬づきたる音にこそ吹きたまひしか。これは澄みのぼりて、ことことしき気の添ひたるは、致仕の大臣の御族の笛の音にこそ似たなれ」など、ひとりごちおはす。

（椎本　三〇七頁）

薫の笛だろうという八宮の推測は確かにあるが、しかし、夕霧の子息たちの笛の音である可能性も充分に残る。

また、この笛の音に感じた八宮からの文、

［八宮］山風に霞吹きとく声［笛の音］はあれどへだてて見ゆるをちの白波

（椎本　三〇八頁）

に対して、返歌を詠んだのは、薫でなく匂宮であった。

いとをかしうおぼいて、「この御返りはわれせむ」とて、

［匂宮］をちこちの汀に波はへだつともなほ吹きかよへ宇治の川風　（同右）

すなわち、この情況にあっても一向《笛吹く》姿態を表さず、笛の音に伴う歌の贈答もしない薫は、『源氏物語』に於いて一度として《笛吹く》身振りを表出し得なかった柏木と繋がっている。

だがしかし、同時に、薫には、柏木との連繋からは脱臼してゆくような《笛吹く》身振りがあるのだった。

今上帝の意向により、薫への女二宮降嫁が行なわれた「宿木」巻末近くのくだり。[15]

彼女の輿入れを明日に控え、帝が女二宮の御殿「藤壺」に渡り「藤の花の宴せさせたまふ」た折、女二宮方から「上の御遊びに」とて「御琴ども笛など」由緒ある品々を出して来る中に、柏木の形見の笛があった。

笛は、かの夢に伝へしいにしへの形見のを、またなきものの音なり、と［帝が］めでさせたまひければ、このをりのきよらより、またいつかは、はえばえしきついでのあらむ、と［薫は］おぼして、取う出たまへるなめり。大臣和琴、三の宮琵琶など、とりどりに賜ふ。大将［薫］の御笛は、今日ぞ世になき音の限りは吹き立てたまひける。　（宿木 二五一頁）

「柏木遺愛の笛」を巡る論稿の多くも、このくだりについては触れているが、いわゆる薫論のいくつかを見るに、「かれ［＝柏木］の嘆きをそれとも知らずに、薫はこの晴れの日に存分に晴らすことをえた」[16]とも、「柏木の霊は、ここに慰められただろうか。おそらく、そうではないだろう」[17]とも説かれている。この笛は、帝・女二宮のいる前で吹かれ、その翌日、薫は宮を娶ることになるのであるから、《笛を吹くこと》と《女性を獲得すること》との連動は、ここでも確かに成されてはいる。また、柏木の形見を薫が受け継いでいるのだから、笛は、まさに「血統の確認媒体」[18]として機能しているかのようだ。しかし、それでもなお、この《笛吹く》薫の周囲には、二つの線の鎖列に直截には組み込まれ得ぬ要素がある。

薫の笛は、手に入れることの叶わぬ最愛の女の前で吹かれているのでは決してなく、この宮は、帝からたっての希望があって初めて娶ることにした女性であり、その輿入れももう明日に控えている。しかもこの女性は、「女二宮」という、かつての柏木夫人落葉宮と同じ呼称を有する、同じく劣り腹の女君であるのだ。

更に、この藤花宴には、柏木の弟で、かつて弁少将と呼ばれた按察使大納言が出席し、その歌声を披露していることに

着目しなければならない。[19]

大将の君［薫］の、安名尊歌ひたまへる声ぞ、限りなくめでたかりける。按察使も、昔すぐれたまへりし御声の名残なれば、今もいとものものしくて、うちあはせたまへり。（宿木 二五五頁）

弁少将＝按察使大納言が、夕霧の《笛を吹くこと》《雲居雁を得ること》の連動を、常にその美声を以て応援していた様は、第三節で挙げた「梅枝」「藤裏葉」巻に見た。

ところが、この「宿木」巻では、按察使大納言は、その歌声を響かせてはいるものの、しかし、《笛吹く》薫を補完する機能を持ち得ていない。

按察使大納言は、われこそかかる目も見むと思ひしかねたのわざや、と思ひゐたまへり。（宿木 二五三頁）

彼は、女二宮を「得たてまつらむ」という心を持ち、「御後見望むけしきも」洩らしていたものの、結局、帝の伝え聞くところとはならず、薫をひどく妬み、

［按察使大納言］「［薫の］人柄は、げに契りことなめれど、なぞ、時の帝のことことしきまで婿かしづきたまふべき。またあらじかし、九重のうちに、おはします殿近きほどにて、ただ人のうちとけさぶらひて、果ては宴や何やともて騒がるることは」（同右）

などと「いみじくそしりつぶやき」していたのだが、「さすがゆかし」くて、宴には参加しながらも、「心のうちにぞ腹立ちゐたまへり」、とうとう「腹立つ大納言」などと称される。

もはやここでは、按察使大納言は、薫の《笛を吹くこと》《女君を得ること》の連動を掩護せぬばかりか、むしろ、薫の執念き対抗者、反対者としてある。

《笛吹く》姿態を表出しないという点を以て、柏木と連繋したかに見えた薫は、ここでようやく《笛吹く》姿を見せながら、しかし《最愛の女性の獲得》との連動は果し得なかった。「横笛」巻に於いて、幼い薫が見せていた《筍を喰う》仕種は、ここ「宿木」に至っても、結局《笛吹く》身振りとしての連動強度を発揮し切らぬままに終る。

八　笛吹く中将

同じ語句が意味を異にしつつ反復したり、同義の語句が形を変えながら頻出したりする『源氏物語』にあって、或る事態や物象が、数少ない語句によって何度も執拗なまでに繰り返し現れる[20]という点で、「手習」という巻は、溢れ出さんばかりの過剰な言葉を有した特異な巻だといえる。故に、この巻の反復する語句を取り上げて入水未遂後の浮舟について論じようとする者は[21]、この巻の独自な律動に呑み込まれてしまう危険を常に伴っている。しかし、そうと自覚した上で、それでもなお注目すべき《笛吹く》身振りが、ここにはある。

蘇生したばかりの浮舟の前に、中将という男が現れる。彼は小鷹狩にかこつけて彼女のところにやって来た。応対は、浮舟の傍らにいる妹尼がするのだが、中将は、

いといたくうち嘆きつつ忍びやかに笛吹き鳴らして、「鹿の鳴く音に」などひとりごつけはひ、

（手習 二〇八頁）

などと、殊更に物思わしげで雅な風をする。しかし、浮舟の無反応に失望し「帰りなむとする」ところ、妹尼が、「笛の音さへ飽かずいとどおぼえて」引き留めにかかり、しかも大尼君まで「笛の音を聞きつけ」て出て来た。そして、

［大尼君］「いで、その琴の琴弾きたまへ。横笛は、月にはいとをかしきものぞかし。いづら、くそたち、琴とりて参れ」

（手習 二〇九頁）

という呼びかけに、中将は再び《笛を吹く》。

盤渉調をいとをかしく吹きて、「いづら、さらば」とのたまふ。

（手習 二一〇頁）

妹尼が琴を掻き合せると、「吹き合はせたる笛の音に、月もかよひて澄めるここち」がして、大尼君はますます感じ入り、「見苦し」と思う人々にはお構いなく繰り言を喋々し始め、とうとう、

［和琴を］取り寄せて、ただ今の［中将の］笛の音をもたづねず、ただおのが心をやりて、あづまの調べを爪さはやかに調ふ。

（手習 二一一頁）

のだった。興醒めた中将は、しかしその帰り途でも《笛を吹く》。

山おろし吹きて、聞こえ来る笛の音、いとをかしう聞こえて、

（手習 二一二頁）

また、翌日もこの笛琴の合奏が思い起され、二人の間に、

［中将］忘られぬむかしのことも笛竹のつらきふしにもねぞなかれける

（同右）

［妹尼］笛の音にむかしのことも偲ばれて帰りしほども袖ぞ濡れにし

（手習 二一三頁）

という歌が交されるのだった。

この辺りについては、「あはれの世界」の「戯画化」「相対化」という言葉で論じられているが[23]、「あはれ」という観念的・理念的な世界の測定は今は措こう。問題は、類を見ない頻度で「笛」という語が繰り返されていること、のみならず、浮舟に下心を抱く中将がここまで執拗に《笛吹く》姿態を表出しながら、この間、浮舟は、そこに存在することすら語られずして終ることである。

この後、浮舟は出家を果し、中将とも薫とも接近遭遇を成し得ぬ地点に至る。六頁に及ぶこの場面を以てしても、《笛吹くこと》の強度は《女君を獲得すること》を連動させ得なかった。二つの線は、鎖列を成すこともなく、虚脱化し空無化したまま拡散してゆく。ここでは、執拗に連続する言葉が

空転するばかりだ。敢えていえば、この「手習」巻は、『源氏物語』中を経巡り横断して来た鎖列を防遏する絶縁体としてある。[23]

九　力動群としての源氏物語

以上、『源氏物語』に於ける、〈笛吹く〉身振りの牽連せる流線、〈笛を吹くこと〉〈女君を獲得すること〉の連動の様相、その鎖列の伸張や屈曲を眺めて来た。

もちろん、ここで十全なる考察が果されたわけではいささかもなく、更に検覈を要する多くの問題を残している。例えば、男同士で吹く笛、紅梅大納言の吹く口笛、例えば、幼い薫から発する〈物喰う〉線……。しかし、あらゆる細部を同様の手口で捩じ伏せるのはやめておこう。これらの細部を掬い上げる鎖列、これらの断片を組み込む線が、また別に発しているはずだ。

本稿では、『源氏物語』の連動や連繋といった現象を、作者とか構想とか、主題とか王権とかいった観念に回収することは、いっさいなされてはいない。そもそも、テクストに、起源も深層も、目的も理念もありはしないのだ。ただ、我々は、テクストという無限運動体の力動の内に游弋し、仕種や姿態、言葉や事物といった原子たちの、微細な蠢動、偶然の邂逅を触知しさえすればよい。

※『源氏物語』本文の引用は、新潮日本古典集成に拠り、巻名とその頁数とを附した。

なお、……は省略したところ、［　］内は私に補ったものである。

註

(1)「きよら」「きよげ」「隔て」「違ふ」「同じ」といった言葉の線を辿る試みとして、

拙稿「源氏物語宇治十帖のことばの線」（『詞林』第一八号・一九九五年一〇月）

を併せて参照されたい。

(2)『源氏物語』の音楽を巡る論稿は枚挙に遑がない。今は、ここ数年に上梓された単行書を挙げておく。

中川正美『源氏物語と音楽』和泉選書・一九九一年

上原作和『光源氏物語の思想史的変貌―〈琴〉のゆくへ』有精堂・一九九四年

また、その研究史は以下の論稿にまとめられている。

吉海直人「音楽」（『別冊國文學　源氏物語事典』一九八九年五月）

中川正美「源氏物語と音楽」（『國文學』一九九五年二月）

土方洋一「『源氏物語』第二部の研究史と今後の展望　多層化と流動化」（『新物語研究四　源氏物語を〈読む〉』若草書房・一九九六年）

(3)「柏木の笛」の問題を扱った主な論稿を挙げておく。

高橋和夫「女三宮物語と横笛の伝授について」（『源氏物語の主題と構想』桜楓社・一九六五年）

同　「柏木遺愛の笛」（『講座源氏物語の世界　第七集』有斐

閣・一九八二年）
浅尾広良「柏木遺愛の笛とその相承」（『むらさき』第二五輯・一九八八年七月）
小嶋菜温子「柏木の笛―幻の血脈へ」（『源氏物語批評』有精堂・一九九五年）
同　「六条院と女楽―喩としての音楽」（同右）
同　「月をめぐって―横笛・鈴虫巻―」（『源氏物語講座 第三巻　光る君の物語』勉誠社・一九九二年）
同　「『有明の別れ』と『源氏物語』―音楽の相伝をめぐって―」（『平安文学論集』風間書房・一九九二年）
（4）廣田收「『源氏物語』における音楽と系譜」（『源氏物語の探究　第十三輯』風間書房・一九八八年）
には、「物語りにおいて笛を吹くことは女への思いを伝え、女からの応答を求めるわざである」、或いは、「男は笛で誘い、女は琴で答える」という論述があるが、ここでは、かような一般化は控えたい。
（5）小町谷照彦「唱和歌の表現性」（『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会・一九八四年）
（6）高橋亨「源氏物語の内なる物語史」（『源氏物語の対位法』東京大学出版会・一九八二年）
（7）河添房江「梅枝巻の光源氏」（『源氏物語の喩と王権』有精堂・一九九二年）
（8）柏木の笛の相伝に於ける准拠の問題については、『河海抄』が触れている。また最近では、次の論稿がある。
浅尾広良「柏木遺愛の笛とその相承」（『むらさき』第二五輯・一九八八年七月）
（9）明石一族の琴の相伝に於ける准拠の問題については、右に同じく浅尾氏の論稿を挙げておく。
浅尾広良「中務宮と明石物語―「松風」巻の表現構造―」（『中古文学』第三八号・一九八六年一一月）
（10）高橋和夫「柏木遺愛の笛」（『講座 源氏物語の世界　第七集』有斐閣・一九八二年）
（11）中村健一「薫紹介の方法と柏木霊歌の持つ意味」（『王朝文学史稿』第一一号・一九八四年九月）
（12）松井健児「『源氏物語』の小児と筍―身体としての薫・光源氏の言葉―」（『源氏研究』第一号・一九九六年四月）
（13）小林正明「逆光の光源氏―父なるものの挫折」（『叢書・文化学の越境一　王朝の性と身体【逸脱する物語】』森話社・一九九六年）
（14）人物造形に於ける柏木・薫の連繋を考察した主な論稿を挙げておく。
伊藤博「薫論序説―柏木の影をめぐって―」（『源氏物語の基底と創造』武蔵野書院・一九九四年）
三枝秀彰「薫試論―その主題的に内実とするもの―」（『中古文学』第三五号・一九八五年五月）
（15）「宿木」巻、特に女二宮の奥入れの問題を扱った論稿を挙げておく。
細野はるみ「女二宮の縁談」（『講座 源氏物語の世界　第八集』有斐閣・一九八三年）
吉井美弥子「宿木巻の方法」（『国文学研究』第八六集・一九八五年六月）
（16）日向一雅「闇の中の薫―宿世の物語の構造」（『源氏物語の主題―「家」の遺志と宿世の物語の構造』・桜楓社・一九八三年）

(17) 小嶋菜温子「女一宮物語のかなたへ—王権の残像」（『源氏物語批評』有精堂・一九九五年）
なお、この論稿は、女二宮獲得から女一宮憧憬へという過程についても触れている。
(18) 深沢三千男「横笛巻ところどころ」（『神戸商科大学人文論集』第一八巻・第三・四号・一九八三年三月）
(19) 弁少将の声については、最近、次の論稿を見るを得た。
吉井美弥子「弁少将の「歌声」—光源氏と「高砂うたひし君」—」（『日本文学』一九九六年五月）
但しこの論稿は、考察の対象を正篇に限っていることもあって、今回本論と関わる点は少ない。
(20) 例えば、「うつくし」「けうら」「きよげ」「憂し」「あさまし」「隔て」「笛」という言葉、或いは、人物たちの髪や容姿の表現など。
ちなみに、「手習」巻には、「頭の髪あらば太りぬべき心地」「くそたち」といったこの巻にしか見られない表現もある。
(21) 例えば、
北川真理「浮舟の形容語」（『東京学芸大国語国文』一九七八年二月）
同　「源氏物語における形代の方法—「憂し」を恐れる薫—」（『物語研究　特集・語りそして引用』新時代社・一九八六年）
及び、前掲註（1）拙稿など。
(22) 原岡文子「「あはれ」の世界の相対化と浮舟の物語」（『源氏物語　両義の糸』有精堂・一九九一年）
(23) 清水好子「源氏物語の俗物性について」（『國語國文』一九五六年七月）
に於ける、「作者は源氏物語をこんなにも書きつぐことによって物語の限界を示しているのである」という論述、また、
篠原昭二「風景の変貌—自然についての記述覚書」（『國文學』一九七〇年五月）
に於ける、「物語の否定の物語」という論述などと、或いは重なるだろうか。
ちなみに、この篠原論文には他にも、「折からの「あはれ」の否定」という言葉があり、前掲註（22）原岡論文に先立つ論稿といえる。

【附記】
本稿は、修士論文「聯動する源氏物語—「横笛」巻の力と線—」（一九九七年一月九日提出）の一部をもとにしたものである。

（かとう・まさよし　本学大学院博士後期課程）